

P-20

161
462

新刊 東忠 君 存 懐 詩

北航 艇隊

千 篇 探 討

西文書房版

北航
艇隊
千島探討序

人ニシテ堅忍不拔ノ志無カルベカラズ若シ夫レ人ニシテ此志無

クンバ大事ヲナシ功名ヲ竹帛ニ垂ル、能ハザルナリ

特⁵¹
978
夫レ千島ハ北極ニ星散セル彈丸黒子ノ地ニシテ内地未ダ開ケズ

肥原沃野ハ空シシ狐狸熊猪ノ尊ニ属シ海藻ノ富漁魚ノ利亦之ヲ

觀ル者ナシ嗚呼天與ノ金庫ヲ開カザルハ國民ノ義務ニ非ラザル

アリ而シテ此地マ一葦帶水外國ト對峙セルヲ以テ間隙一度ヒ開

クハ艦艦此地ニ集ル此時ニ當ツテ數百ノ土民アリト雖モ何ゾ之

ヲ防グコトヲ得ン北門ノ鎖鑰タル千島ニシテ此ノ如シ豈千古ノ遺

憾ニ非ラズヤ鄒司大尉茲ニ見ルアリ決志ノ士百名ヲ從ヘ遠ク千

島ニ趣キ以テ大ニ爲スアヲントス何ゾ其ノ志ノ偉大ナル管ニ吾

人ヲシテ血涙ヲ流サシムルノミナラズ國民ヲシテ勇氣ヲ鼓舞セ

シム決シテ尠々ニアラザルナリ堅忍不拔ノ士ニアラズシテ何ゾ
 能ク此大快事ヲ企ツルヲ得ンヤ請フ君千島ニ到ルノ日莽棘ヲ
 去リテ良田ヲ作り荆榛ヲ鋤シテ土地ヲ開拓シ大ニ殖産興業ノ道
 ヲ開キ更ニ進ンテ北門ノ鎖鑰ヲ固フシ以テ國威ヲ發揚セヨレン
 一チ是余輩ノ君ニ熱望スル所ナリ聞ク島ハ嚴寒骨ヲ刺シ苦雪指
 ヲ墜スガ如ク而シテ猛獸毒魚多シト君夫レ國家ノ爲メニ自愛セ
 ヨ今ヤ君ノ發船ニ方リ感慨ニ堪ヘズ文ヲ草シテ行ヲ送ル嗚呼先
 キニ福島中佐ノ偉業アリ今亦君ノ快事アリ誰カ國家ノ元氣ハ復
 タ振ハズト謂ハン聊カ葱言ヲ陳ヘテ之ヲ序トス

明治廿六年六月

島田三郎識

緒言

嗚呼千島は地球上水産の第一地たり而して又本邦の北門要地あり然るに政府も國民も
 敢て此が方策を務めずして遠くメキシコ南洋朝鮮等に力を用ふるとはそも何事を吾人
 決して之を思はざるにあらざらん然れども唯内治を後にして外を先にするの拙なるを
 憂ふるのみナポレオン三世の政略不可なるを主張するものなり 畏しこくも全に
 なる我文武天皇陛下には夙に北門に震襟を垂れさせ給ひ客年嚴冬寒氣颯々瀟瀟の候な
 るに不拘

北 航 艇 隊

千島探討ノ事朕頗ル其必要ヲ認ム而シテ侍臣多クハ薄柳ノ質
 ニシテ之ガ任ニ堪ヘザルヲ憂フ之ヲ能クセント思フモノハ唯
 利和ノミ風雪ノ裡朕實ニ汝ヲ遣ルニ堪ヘスト雖ヒ汝能ク之ニ
 赴クヤ否ヤ

此有りがたき御勅命を片岡侍從に下し賜ひ千島群島及カムサカサガレン等を探檢せ
 しめらる嗚呼人臣民は感佩の外他あらざるなり是れ茲に我皇土千島の爲め千秋の帝國
 を潰さざらんが爲事の起らざる先に地理を同胞に告げ已往歴史を叙し尙ほ此ニ對する

北 航 艇 隊

緒 言

嗚呼千島は地球上水産の第一地たり而して又本邦の北門要地あり然るに政府も國民も敢て此が方策を務めずして遠くメキシコ南洋朝鮮等に力を用ふるとはそも何事ぞ吾人決して之を惡しと言ふにあらざ然れども唯内治と後にして外と先きにするの拙なるを憂ふるのみナポレオン三世的の政略不可なるを主張するものなり 畏しこくも至仁なる我文武天皇陛下には夙に北門に震襟を垂れさせ給ひ客年嚴冬寒氣颯々凜冽の候なるに不拘

千島探討ノ事朕頗ル其必要ヲ認ム而シテ侍臣多クハ薄柳ノ質ニシテ之ガ任ニ堪ヘザルヲ憂フ之ヲ能クセント思フモノハ唯利和ノミ風雪ノ裡朕實ニ汝ヲ遣ルニ堪ヘスト雖モ汝能ク之ニ赴クヤ否ヤ

此有りがたき御勅命を片岡侍從に下し賜ひ千島群島及カムサツカサレン等を探檢せしめらる噫吾人臣民は感佩の外他あらざるなり是れ茲に我皇土千島の爲め千秋の帝國を潰さざらんが爲事の起らざる先に地理を同胞に告げ已往歴史を叙し尙ほ此に對する

方策を論じ急に我黄金千島經營の大業を江潮澎湃する所以なり

明治癸巳年六月

編者 識

千島探討

北航艇隊千島探討

國家の富強を博する所以の道固と多岐ありと雖も忠勇義烈ある愛國の士に待つや多し
歐州近世の冒險者探險家が或は熱砂寒境を跋涉して學術上の研究を志し或は島嶼獸國
を探討して自國の版圖を廣め或は海經未載の航路を駛行して通商貿易の利を占むるが
如きは皆に學藝射利の事のみならず之が爲め國民の元氣を振作し國威を中外に宣揚す
るに於て與て大に力ありとす

願て我國情を通觀するに紛々擾々徒らに嶋牛角上に輪瀛を争ひ國力を増進し國權を伸
暢するを謀るもの實に寥乎として絶て無くして纔に在に過ぎざるのみ夫此の如くにし
て底止する所なくんば遂に我國威を奈何せん又祖宗の社稷を奈何せん然れども時なる
哉天の偉人を生し烈祖の後世子孫に遺し玉へる六合を兼ね八紘を掩ふの大圖を完成せ
しめんとす其人を誰となす曰く陸に於ては福島中佐あり單騎孤鞞亞歐の兩大陸を横截
し海に於ては郡司大尉あり輕舸長楫千島の極北に沂洄せんとす俱に是れ空前の壯圖絶
大の偉舉と謂はざるべからず

抑千島は宇内水産の要地にして我國北門の鎖鑰なり是を以て千島の拓殖千島の警備の

北航艇隊

急務たるは愛國家の常に絶叫して止まざる所なり往年千島の樺太と交換して我版圖に歸したるは各國明認する所なり然ども今猶ほ邦人の往て住するものなく空しく海煙水霧の鎖す所となり外國の密獵船をして縱まゝに我か獸魚を捕獲せしむ彼れ外人の亡狀固より誅するに餘ありと雖も抑々彼をして此に至らしむるは我より乘すべきの隙を與ふるが爲めなり我同胞の憤起して鞭を著け無數の島嶼に國旗の閃爍するをば彼豈敢て一步を此間より移すを得んや獨り彼が罪のみならず我亦鎖鑰を慢にするの責めを分たざるべからず

大尉は眞成なる愛國者なり夙に心を千島の拓殖に注ぎ日夜其事業を畫し身を以て此大任に當らんことを欲し之を先進諸將に謀り熱心ある賛成を得自ら請ふて海軍豫備に偏せられ勇壯活潑なる海軍退職の下士一百三十餘名を率ひ濱渤の外に向て偉業を策せんとす何んぞ壯快なるや畏くも我允文允武なる 天皇陛下は夙に聖慮を北門に垂れさせ玉へ獲まり 侍従を遣して千島の實況を視察させしめ今又大尉の壯圖を嘉稱し賜ふに内帑の金若干を以てせらる茲に於てか大尉或泣措く所を知らず死を以て優渥なる聖旨は對へ奉らんことを誓ひ驟然起て報効義會を組織し三月廿日をトし舟を墨舵の東岸

に騰し意氣昂然として纜を解き流に隨て降る兩岸幾萬の士女萬歳を唱て壯舉を祝するの聲は林に震ひ波を翻へさんとす世間或は曰く大尉の此行福島中佐の勲を倣ひ効名を博せんと欲するの冒險心に出でたるものにあらずやと然れども是れ大尉を知らざる者妄言のみ吾儕之を聞く大尉の此行あるは明治十二三年の間に胚胎し爾來十數年其籌策を講し準備既に成りて今回に及べるなり夫れ船舸を造成し義旅を聚合し而して國家の爲めに百年の事業を創始せんと欲するもの豈一朝一夕にして能くすべし所ならんや福島氏は自ら福島氏なり郡司氏は自ら郡司氏あり各々壯圖を懷抱し各偉業を行ふものなり固より丈夫の事を爲す豈他人の藩籬に倚るを屑しとせんや讓者輕々の看を爲すを止め徐ろに大尉の意を付度せざるべからざるなり願ふに大尉の義に勇み苦を忍ぶの赤心は能く澎湃たる激浪怒濤を蹴破し前途の千艱萬難を排除し外慮の邊海に出没する者を驅逐し我帝國の威稜を中外に發揚し國富を増進し儼然たる北邊の一大鎮となまや必せり彼の占守島の濛々たる白雲は此絶大の快男子を待て色を變じ千島海に蕩々たる蒼波は此偉業家を得て光を發するや明なり希くは大尉天地神明に誓て勇往敢爲子が一身に荷へる大任を完ふし上は聖慮を安んま奉り下は國人の重荷を全ふせんこと實に惘望に

堪へざるなり往けや郡司大尉勉めよや郡司大尉

◎郡司大尉の履歴

君氏は郡司名は成忠幼名を力藏と稱す万延元庚申年十一月廿日江戸下谷に生る父は幸田成延母は猷子幼にして出で、郡司氏を冒せ幼よして勇壯の氣象に富み活潑にして屢々近隣の兒童を服従せしむるを以て其父兄等の訴に逢ふこと幾度なるを知らず長じて多感常に忠孝節義の談を聞くを好み其義理に激するに至りては涙を揮ふて賛嘆するに至り時に或は激怒して苛酷の言動ありと雖も而かも中心は洒々落落光風霽月真に大丈夫の概あり幼にして略ぼ群番に涉り明治九年九月一日海軍兵學寮入寮を命せられ十一年一月十四日乾行艦稽古乗組員とあり五月十四日金剛艦に轉乘し同八月十六日北海道を経て露領浦鹽斯德港へ航海せり此時早くも感を手島に起し深く其の腦髓を惱ましたり今回の壯圖全く此時に淵源せりといふ十月七日歸朝十二年二月六日筑波艦に轉乘二月二十三日海軍兵學寮卒業し三月三日新嘉坡に航海六月三日歸朝し九月十日筑波艦稽古乗組となり九月廿六日日本海を環航し十月二日歸京十二月廿三日海軍少尉補に任せられ十三年三月廿三日筑波艦に乗組み四月廿九日北米萬古福島に航海し九月廿九

千島探討

北航艦隊

日歸朝十四年十一月廿一日鹿兒島に廻艦十二月七日一等月俸を下賜せられ十二月廿日歸京十五年三月四日新西蘭に航海し九月八日海軍少尉に任せられ十五年十月五日歸京せり十月三十一日正八位に叙せられ十一月十六日筑波艦の乗組を免し更に攝津艦の乗組を命せられ十六年九月七日海軍兵學校兼務仰付られ十一月十日二等月俸を支給せられ十六年一月廿三日攝津艦并に兵學校兼務を免され同日兵學校教授に補し五月廿三日本職を免し再び攝津艦乗組を命せられ十一月十日一等月俸下賜せられ十七年一月廿三日攝津艦乗組並に兵學校兼務を免され同日兵學校教授に補し五月廿三日本職を免し同日攝津艦乗組を命せられ同日兵學校教授を兼務し十月廿二日攝津艦航海士に補せられ十月廿二日攝津艦乗組を免せられ十八年四月十五日生徒大試験掛となり六月廿日海軍中尉に昇任し同日本職を免し攝津艦乗組となり監事を兼務し七月十八日軍用術掛となり九月十七日從七位に叙せられ九月廿五日攝津艦乗組を命せられ同日攝津艦分隊長兼兵學校監事に補し十九年二月十七日兵學校運用術教授兼生徒分隊長に補し同日一番分隊士となる同廿五日兵學校大試験委員とあり三月廿九日運用術教授番編修委員となり四月十日兼職を免し生徒分隊長に補し五月十三日入校志願者体格検査委員及入校志願

者學術試験委員となり七月十三日官等改正時代奏任五等大尉となる十月十五日日本職並に兼職を免じ扶桑艦分隊長に補す十二月二日尾州武豊に回港同三十日歸京廿年一月九日神戸に廻艦同三月九日歸京同六月清水に廻艦七月八月歸京十月九州に航海し十月廿九日上等俸給を給與せられ十二月廿四日日本職を免じ滿珠艦分隊長に補し同年十二月二日歸京廿一年十月十八日奏任官四等に陞叙し十一月十五日海軍大學校甲號學生となり同日日本職を免す二十二年七月二十九日海軍大學校水雷科卒業二等証を受け二十三年四月十一日海軍水雷練習第二等卒業證書を受く四月二十九日水雷長適任證書を受く五月十五日高千穂水先長に補し二十三年七月十一日館山沖に於て射的をなし十四日歸品八月五日出航三陸及北海道に航ぎ十月八日品川に歸る十月二十日館山沖に於て射的二十三日横須賀に歸泊十一月一日正七位に陞叙し二十四年二月十六日鹿兒島に航海品川に歸る八月五日品川の海を發し支那朝鮮へ廻航し舞鶴青森を経て十月三十日歸京十月一日高千穂水先長を免じ造兵廠検査科主幹兼技術會議委員に補し二月十七日東京灣口敷設水雷試験委員を命せられ三月二十二日海軍大演習審判官陪審員を命せられ七月十五日機械水雷装置改良案臨時調査委員を命せられ十月六日日本職並に兼職を免じ同年同月待

命二十六年二月六日豫備を命せられより

◎ 壯 圖 の 準 備

凡そ事は企つるに易くして行ふに難し縱令如何なる偉業を企つるも之を遂ぐるの方法宜しきを得ずんば百年の辛酸空しく北邙一陳の煙と化するなを保せず大尉は智勇兼備の名士なり今回の壯圖を貫徹せんとするの用意周到真に人意を強ふするに足る則ち其趣旨を問へば左の如し

◎ 千 嶋 移 住 趣 意 書

千島群島は我國北門の鎖鑰にして其警戒寸時も忽にす可からざるは識者を俟たず去て明かなり然に義に勇むを以て誇れる皇國人にして從來千島を開拓するの舉なりりしは豈に近寒僻遠を恐るの故に由るに非ざらんや千島の樺太と交換して本邦の版圖に歸じたるは各國共に明に認識する所なるに外人此處に來て海獸鯨族を密獵し巨多の利益を收め去るに狀之れより甚したはなし我邦人之を知て未だ之を斥くるの舉なし此の如くにして若し荏苒歲月を経過し彼をして密獵の習慣を成さじむるに至ては其習慣は彼の癖柄となり他日之を斥けんとするに當て紛議を生ずるや必せり

天皇陛下に長くも特旨を以て侍従を派遣したまへるは抑何の故ぞや國人若し奮進の勇氣あつて業既に千島を拓きたらんには何ぞ斯の如く大御心を煩し奉る事あらんや今や成忠之を他人に待たんよりは自ら奮て之に當るの愈れるに如かざるを知る恰も好し海軍退職下士卒一百餘名と共に志を同ふし千島の北極占守嶋に移住して其地の帝國版圖たるの實を擧んことを望む是に於てか一片勇往の精神を神明に誓ひ國体を保し國利を興さんことを企圖し其の大方針を定むるよし左の如し

- 一 國務上に必要なるか爲めに新知嶋北端ブロートン灣口の岩礁破砕の實地試験をなし
- 一 其結果を内地に報道するよし
- 一 漁場の探検をなして其結果を内地に報道するよし
- 一 將來内地より被服糧食の供給を仰ぐことなく自活の方法を研究其結果を内地に報道せること

豫備海軍大尉 郡 司 成 忠

◎遠征の閉出

十里の長堤櫻花未だ綻びず北風尙ほ肌を刺すの候墨江の兩岸幾万の群集を見水上亦秋

北航艇隊

の本の葉の散り布くが如き奇觀を呈せしもの花を賞するが爲にあらそ月を詠むるが爲めにあらそ皆是れ報効義會郡司大尉が部下の艇隊を賛し軍荼利夜叉の旗章を翻へして遠く千島に之くを送らんが爲なり請ふ趣く當日の景況を略叙せん

發程の地 時維れ明治廿六年三月廿日春季皇靈祭の佳辰午前九時船を墨江の清流「言問」の岸より發す是より前き豫ねて横須賀に艦裝せる五隻の端艇中三隻を廻航し其假事務所を近隣の福岡樓に設け大尉以下一同此處に宿して發船の準備を爲したり

送別の準備 此日北洋物産株式會社は大尉が千嶋にて獲得せし物産を一手に賣捌くの緣故あるを以て特に送別事務所を吾妻橋畔なる太田實氏の邸に設け其前面の河中に於て絶えず煙火を打揚げ以て當日の偉觀を添へ別に川蒸涼船を買切て社員及び來賓を乗せ之に樂隊を乗せたる大傳馬船を曳かしめ洋々たる奏樂の聲は習々たる川風に響かし徐々上流に進んで大尉乘船の場所に来り其發程を待受けたる此他帝國大學高等中學校海軍大學校海軍主計校學習院高等商業學校尋常中學校應義塾日本中學校共立學校日本銀行三菱會社及軍艦愛宕葛城二艦の端艇を始めとし其餘各私立學校并に一私人の端艇和船等何れも旗章を翻し最も熱心に此壯行の見送に廣集せり

兩岸の歡送　大尉が絶大の壯舉は實に一般人心に向て至大の感動をや與へけん此日朝來空曇り風寒かりしにも拘らず都下幾万の貴賤老若は早天より絡繹として言問近傍に群集し其雄姿毫も花時に譲らず加之上は言問の近傍より下は築地の邊に至るまで兩岸に歡送する者須臾にして人の山を築きたり且つ吾妻、厩、兩國、新大橋、永代の五大橋上の來觀に尤も倔強ある場所なれを集るもの宛ながら堵の如く其熱鬧川開きにも愈増したり

送別式　時既に九時を過ぐ帝國大學の學生ハ大尉を帝國大學艇庫の樓上に招待す大尉即ち報効會員中廿余名を率ひ之に臨み最嚴肅ある號令を以て會員を一行に整立せしめ自ら其右翼に進む此時谷子爵は最も勇壯にして最も簡潔なる告別の辭を述べ且帝國大學學生を紹介し帝國大學學生高橋作衛氏進で送別文を朗讀す谷子爵郡司大尉萬歳千嶋萬歳と絶叫す會衆之に和して連呼す尋常中學校生徒總代送別文を朗讀す谷子爵郡司大尉萬歳千嶋萬歳と絶叫し會衆之に和して連呼す東京英學院生徒總代送別文を朗讀す谷子爵郡司大尉萬歳千嶋萬歳と絶叫し會衆之に和して連呼す

最後に榎本子爵熱心なる別辭を陳べて式終り大尉は樓を下り右手に帽を捧げ左手に送別文を持ち歡呼喝采の中に一禮して岸に下り船傳に北洋物産會社の船に入るや社長太田實氏祝文を朗讀し次に日本銀行端艇會員總代同じく送別文を朗讀して式全く終りぬ送別文　帝國大學有志者の送序文左の如し

送郡司大尉之千嶋序

或曰、我邦人非能愛國者、而徒慕國者也、是以纒出舊里、即有離別可憐之色、若夫去鄉萬里奮趨危險之地以利於國、則非其所能也、其言雖似甚酷、然亦有理存焉、蓋邦人慕國之弊、其所由來久矣、徳川氏鎖國政策已啓其端、方各藩對峙法重禁嚴也、士人皆難出其境、慕國之弊漸堅、維新之際、天下多事、愛國志士奔馳西東、不遑思家鄉、士氣振起、人心鞏固、有利刃脫匣紫氣衝天之概、而慕國之弊亦賴以得矯焉、爾後二三十年、國運漸泰、士氣漸衰、奢侈之風、宴安之習、糜亂人心、而嚮者際會戰亂遭遇時難者亦變爲柔惰、干莫之銳、將爲烈火所熔、於是慕國之弊復起矣、有遺利焉不能收之、有餘業焉不能繼之、北門鎖鑰久失其守、如千嶋容他人之所睡而不顧、舉世滔滔、唯安逸是求、方是時、郡司大尉辭職、與志士百餘人決死赴千嶋、將

大有爲、可謂壯矣、夫人誰不知珮玉銜美、揚揚鞭驅之可快、吟花諷月、置酒歡呼之可樂、與率孤群入絕域、凌風雪冒瘴癘之可畏可苦、而大尉能捨彼取此、與流俗異其撰者、非真愛國、焉則能得如此耶、聞大尉之風者、儒夫亦有立志、庶幾乎、我邦之士氣自是振起、得以矯慕國之弊、遺利可收餘業可繼北門鎖鑰當得其守、某等竊爲國家望此行之有成也、大尉其勉旃

明治二十六年三月二十日

帝國大學有志者拜具

又北洋物産株式會社發起人總代として太田實氏が船中にて朗讀せし文章を左の如し
 維時明治二十六年三月二十日皇靈の祭辰に方々天淨く氣爽かなり海軍大尉藤司成忠君其組織する所の報効義會々員を統率し此日を以て北洋遠航の纜を懸陀堤下に解かんとす此行や尋常浮槎遠遊を事とするの比にあらす報効義會が天の龍靈と江湖義人の協贊とに依り我日本帝國版圖内極北の資源たる千島州に征駐せらるゝが爲なり謂つべし策も亦大なりと然りと雖も絶海層洋波濤險惡ならざるにあらざ蠻烟瘴霧風氣剽厲ならざるにあらす氷雪の鎖すところ巖嶽皆凍り熊熊の窟まるところ樹石多く裂く居るに屋舎なく食ふに米粟あし此殊域に投じ功を拓殖に轉じ國利を永遠に規畫し

國權を邊疆に擴張し一の以て北門の鎖鑰を固らし一の以て無盡の資源を開かんとする者蓋世の雄略を抱き百折千挫不撓不屈の精神を有するにあらざるよりは焉んぞ能く其目的を達せざるを得んや今や郡司大尉の此大責任を數隻の輕舸に搭載し一百有餘の會員と共に北溟の浪を破り畢生を拓殖の事業に委し北門の鎖鑰を嚴守すると同時に鐵槌一揮資源を打破開發せんことを誓ふ天下の壯舉人生の快事何物か之に若かん不肖太田實等郡司大尉の邁志と膽勇とに感激し聊か君が爲に後願の念なからしめんと欲し遂に同志と與に北洋物産株式會社を興し報効義會と契約する所あり若し夫れ義會か北洋に於ける需用は我社一切之を辨達し敢て自ら拓殖軍の薪劑を以て任することを辭せざるなり請ふ大尉安んじて北洋に馳驅し拓殖軍の准陪たれ茲に北洋物産株式會社を代表し別を送て前程を祝すと云爾

北洋物産株式會社發起人總代

太田

實

發程の偉觀 九時四十分頃大尉が驟然別れを一同に告げ拍手喝采の聲裏に身を北征艇隊中に投するや樂隊は「今度此度御國の爲めに、遠く離れて北へ行く」の新樂譜を奏し艇隊は一齊に楫を上げて送別の意を表したり兩岸萬嶽の聲は恰も萬雷の落るが如く

見送りの汽船端艇流に従ひて共に下り行く。大尉と兩岸幾萬の群集に對し帽を揮りて分れを告げ堤上堤下喝采の聲暫らくも止まざりし時に煙火數發空に響き軍樂の聲は劉皖として起る吾妻橋を下りて數百尺適々岸上銃を肩にし背囊を負ふて屹立せるもの四人あり大尉逸早くも之を認め帽を振ひつゝ陸行者萬歳を唱ふ同行者之に和して大呼す其聲水上に震ふ而して大尉の「行け」の聲を聞くや四烈士は銃を肩にし奮然驥足を出して陸路千島に向へり聞く此四烈士は一夕たりとも宿泊せず露宿風餐一枚の毛布に寒を凌ぎ内地を過りて北海道に涉り根室に出で艇隊と相會するものなりと而して其旅費を問へば一人六圓五十錢を所持し其他非常預備金として各一圓の餘剩あるのみなりと噫四烈士陸行の辛酸豈尋常人の堪ゆる所ならんや勇將の下賜卒あし大尉の前途亦多望なりと云ふべし

吾妻橋下流の光景 大尉の一行御藏前に到れば工業學校は水門を開きて紫幕を張り船を水中に浮べて煙火を打揚げ万歳を唱へて行を壯んにせり兩國を過ぎ大橋に至るやカッター一隻及びジャンパー一隻小蒸氣船に曳かれて横須賀より來りたるを以て艇隊全きを得船艦相衝突で永代に向ふ日本銀行員は岸上船中に立て歡呼し橋上亦陸軍兵士列を

正して喝采す茲に於て艇隊は橋を建て帆を揚げ南駛す石川嶋邊には商船學校の端艇大尉の一行を送迎し築地の海岸に至れば居留外人も手巾を振り帽を揮りて壯行を送る此くて芝浦に至り第二第三蚤場の中央を過ぎ眼界新なる所に於て舟を停めて萬歳を三呼し熱心なる見送者に別を告げたり此時主計學校練習生諸氏は新作の短歌を三唱して大尉の壯行を送れり即ち

郡司大尉の勇壯發航を送るの歌

今度此度國の爲めに。堅く盟ひし大丈夫が。六つの小舟を漕ひて。高く高く大波や暴れに暴れたる汐風を。何の苦もなく千里海を。漕ぎて行きつく古守島。閉くも恐るるし海原の。鳥も通はぬ離れ嶋。建てし御國の日の丸の。旗は旭日に輝きて。東風を孕みてひらくと。なびく四方の異國も。いつか稜威に服しけん。來り降るも時ならじ。君の動も千代八千代。昔の巖と諸共に。朽る時しをなかりけん。其聲や朗々。其言や雄爲に。二入の勇壯を添へたり。終に於て艇隊は滿帆に風を孕んで雲煙渺茫の中に駛行せり

◎大尉の前途

千古の快男子海軍大尉郡司成忠君の絶大の雄圖を懐抱し經營慘憺諸般の準備全く成り
 今や千島遠征の壯程を上れり想ふに二千里の海程片々たる端艇を以て驚濤激浪の間に
 出沒し彼の體々たる降雪地を埋め濛々たる蠻煙瘴霧空を鎖さるの無入境に到達し危岩
 暗礁の間を出入して國家の富源を開拓し斯に耕し斯に耘し斯に漁し斯に獵し斯に村落
 を造り鶏鳴狗吠の相聞ゆるに至らしめ以て外奴の乗するの隙をからしむるに至らむ
 るもの眞に大尉の重任あり呼虎穴に入らずんば虎子を待たず希くは大尉千艱萬難を排し
 て空前の壯志を貫徹し上 皇恩の優渥に對へ奉り百萬民の輿望に背かざらんこと切望
 に堪ざるなり大尉夫れ國家の爲に自愛せよ

◎移住目的地

我皇土千島の日本帝國の東北隅即ち北海道の東北に當り蜿蜒羅列せる無數嶋嶼のの總
 稱あり
 勢地西南より斜走しベーツリング海峡を隔て、カムサツカに對す北緯四十三度二十分に
 起り五十度五十六分は達し東徑百三十六度五十二分に起り百四十七度十五分に終る嶋
 脈海面に出沒して陸地をなせるものと陸地をなせるものとあり陸地をなせるもの凡

そ大小合せて三十有六南端の色丹嶋に止まり北海の海上六里を距て、魯領カムサツカ
 のロバート岬に接し其東西の太平洋に臨んでオエーツク海を分界す千島海峡によ
 り根室を隔る、事百五十海里島形の細長にして尤も廣き所は六里に余り狭き所は二里若
 くは一里にして周圍六百十三里余面積凡一千三十万里人口凡七百余人に過ぎず而して
 大尉の移住開拓せんとする占守島は波羅牟知嶋の東北一里の所にあり東西八里南北六
 里余ありて平坦なる上陸なり其東北端の所謂魯領カムサツカにして此距離海上遙かに
 四里西側の乙女岬に斜向せりナボイト港は此嶋中の尤良港にして船舶碇泊に便なる
 所なり陸上は土人の住居せし所にして色古丹の土人此嶋より移住せしむ國標も此處に
 建立しあるも其字体稍消滅せんとす
 二、地勢、此嶋は東經百五十六度十分より百六十六度三十七分に至る北緯五十度四十
 分より五十度五十五分に至る根室港は東經百四十四度三十四分北緯四十三度廿二分にあ
 り故に根室よりナボイト港まで北東直經凡三百余里の地なりと雖も夏候温暖にして
 他嶋よりも早く雪を消散せり
 三、産物、川は所々にありて至る所鮭の浜上するを見る陸獸は熊狐の類棲息するも鮮

なし樹木矮小用材に適せず水質可なり海岸の遠く淺くして魚類多し東南と西端の南側の獵虎の産所たゞ海豹四周殊に多し島の南側より三里余の所にロウカヌ嶋あり島形低く煙波の間に隠見出沒しあるが如し恰も無天に異ならず故に風雨の日は之を見ることが能はず海上潮流劇烈なる爲航行に苦しむ尤も獵虎居るも少なき有様なりと云ふ

我千島全島の海岸の參差頗る多く水底一般に深く又岩底あり南海岸の暗礁多く風波荒し冬季（十二月より三月に至る）は船を容るに苦しむ然れ共西海岸は至る所良港の存するありて大船を淀泊せしむるに足る即國後嶋の泊港、樺提嶋の振別、内保の諸港得撫嶋の小舟港等深各五六仞より十五尋以上に達し常に我軍艦及密獵商船の入港するあり其他各嶋嶼の水深く何れの處にも淀泊し得べしと云ふ殊に海岸及近海一般魚類の群集地あり

◎ 氣 候

内地人は北海道を目して寒地となし殊に千島の如きの降雪地を埋め互寒堪ふべからざる地方なりと想像するが決して此の如き氣候にあらざるなり得撫島以南は冬季に於て氷結すと雖も該島以上は氷結する事あらざるなり是れ蓋し或り小島羅列し赤道潮流の

流通し且つ急激なるに由るなり而して千島の極北占守島に於てすら魯國の屯田兵の農耕に従事し燕麥馬鈴薯玉葱等を培養播種せるあり是を以て千島は決して耕作に適せざるの地となすに足らず土地多くは岩石墳土なりと雖も占守嶋延得撫樺提國後色丹の如きは内地の山陰地方より一層肥沃の土地ありされば草木の繁茂して家屋用材及薪炭に欠乏する如き事あらざるなり唯沿岸の樹木は海風の爲に成長を妨げられ矮小なる者のみなり氣も亦山陰北陸東山地方より暖かなる地方なしとせずされば世人千島の不毛の地にあらず又極寒の地にあらざるを記臆せよ

◎ 風 俗

千嶋土人の生計は一般今日限りの需用に充て貯蓄の念あらざるあり概して本邦内地人の爲めに壓せらるる風あり例之の採薪の爲めわざ／＼數町の山に入るも朝の朝たけの差當りて入り要分を持來るよし餘力あるも夕若くは翌朝の爲め一枝だも持歸らざるなり淡如として慾なく其狀太古の人の如し彼等は本邦内地人其會長に對しては頭を垂れ動作凡て命する所となる土人の衣服の長く身幅廣く袖の短し多く紺地に白き縞ある日本風の服を着せり婦人の鳥の羽にて織れる服を着し背にセーハヘアの類

なら)を糸にて繋ぎ海獺の皮にて造れる長さ筒の襪をはけり又アサウルカムサカの方言に老人をヤンヤラと云ふ其轉語あり)は極めて不足あり小兒を負ふに紐にて襖掛け縛る男子の髪は皆深くして黒し其外頭面總体に飾なし婦人の唇の周りに二分斗り并に両手を青く染めおけり性極めて質朴なるが如し

◎千島上古史

何れの國を問はず上古の渺茫測度すべからず千島の如きは少數土人の穴居なりしならん此等の土人の帝國内地の土人倭人種の爲に驅逐せられて遷移しふるものとカムサカ地方より侵入せるものと外ならず而して千島全体に上古より本邦の版圖たるに相違なし何と云へば往昔厚岸地方の土人得撫以北占守島までを指してチユフカクルと名つけ恰も土人の眼にて我が隣村の感ありしと蓋しチユフカクルといふアイノ語の東部落たる意味なり往古已に我版圖たるも徳川氏大船禁止の政略の延びて萬國地圖上露のクローツル島と化せしなるか此地土人酋長の部落地にして後年蹄領に歸せし皇極齊明の朝にして其後藤原氏の支配下とある然れ共千嶋全嶋にあらず唯國後探討のみ僅に其土地あるを知れしなり鎌倉幕府以後松前氏世々之を領す天下北地の廣く且つ土地の富

饒なるを知らざるにわらず又望なきにわらずと雖も松前氏龍飛の險を怖れしめたるを以て人皆自ら棄て、松前氏に與へしなり(現今の箱館あるを殺へずして險惡なる恵山あるを知らしむ)徳川氏天下を一統するに至るも松前氏の領たり寛政年間外交多端あるに際しロシアの使節松前に至り通信互市を請ふ松前氏幕府に報じ幕府命じて長崎に至らしむ是に於て徳川氏俄に意を用ひ遂に其十一年幕府領を収めたり
文化元年(千八百〇四年)魯國の使節レサント再び長崎に來り國書呈せしに同地在留の蘭人已れの商權を奪はれん事を恐れ口實を設けて魯西亞の北地に意あるを説したり(夫れ或り然らん乎)幕府其事に従ひ通商を許さざるのみならず寛政年中魯人が松前に來り幕府より附與せられし書面(日本政府へ申出るとわらば長崎表へ申越すべし)をも還さしめしかば魯西亞大に憤り文化三年(千八百六年)樺太を襲ひ我守兵及米穀を奪ひて去る同八年(千八百十一年)魯將ゴロイン等軍艦を率ひて國後に來る幕府前年の暴舉を責めて之を擒にも魯艦にあるリコルド等之を見て大砲を發し僅に戦ふて去る翌年リコルド又我漂民(占守島に漂流せしもの)を護送し來りゴロトン等を還さんとを請ひたれども得ず遂に我邊民數人を捕ふて還る中に淡路の市民高田屋嘉兵衛あるも

のわが職略衆に超へ其堪察加に因襲せらるゝや魯國の言語を學びぬ是に於て兩國の調和を謀らんと欲し魯人に説て其奪取所の財物及廢を日本に還さしめ日本に還りてコロロン等を放還せしむ是れより北海來寇の患始めて平ちく嘉兵衛の功大きりと云ふべし然るに松前地も千島地も松前領たりし時よりの産業大に衰へたりしかば幕府の再ひ松前氏に與へたり是れ文政二年なりしが又再び徳川幕府之を收め同六年紗那のみを除き之を松平陸奥守に與ふ此時國後擇捉會所なる者を設け彼の運上の制を行ひ番屋と稱して國後に七ヶ所擇捉に八ヶ所の漁業場を置き専ら漁業を營ましめ番屋の外は一切他人に漁業せしめざる制度を施行したり維新の革命以後明治政府の立つや千島國と稱し國後擇捉紗那藥取揆別の五郡を置くに至れり（明治二年）然れ共尙ほ諸藩の領地たる故の如し明治四年黒田清隆開拓使長官となりて北海道を管理するや開拓使に隸し尋て同五年根室支廳の管治に歸せり

◎千島嶋の狀

十九世紀の今日ハ實に多事あり猛虎豪獅の前面に逼るる強鷲剛鷹の後脊を襲へ彼等の秘密を荷へる探偵密獵船は北海千島に出沒し陰に利を奪ひ遠く我國を窺ふの策を畫す

嗚呼千島開拓防備夫れ急ならずや千島てう眼業に已に後れたり最早莫大の利と探偵測量の彼等の爲に計畫せられたり吾人思ひ茲に至れば慷慨憂憤餘りあり天を仰て長嘆するの外ぞあし日本帝國如何せん北海道の北位如何せん千島の寶庫如何すべき千島の地たる地勢上に於てハ北門の要衝其周圍の海には無盡藏黄金の海産物あり陸上亦硫黄及他金屬の閃々たるあり然れ共此等の利ハ當局者と同胞も知るや否やハ知らずと雖とも敏捷なる外國人の密盜に供せり蓋し國後擇捉を除くの外は未開茫茫人烟の存するなく寶貨土中に埋没しあるも有慾の人なく樹梢に觸るゝ風聲ハ無情を告げ海岸を濤つ波浪は悲愁を訴ふるものゝ如し眞に北門の眞景ハ雪後の鳥にして慘又極まれり吾人轉た悲憤に沈むの外なし見よ魯ハ今日より四十年の前に於て尙ほオコック海の利あるを知りて樺太を蠶食し今や又サイベリヤ鐵道を敷きて我北門を窺ふしかのみならず其艦隊ハオコック海にありて密獵船を禦ぐの傍國防の策を講ず然るに獨り我國ハ千島に對て何の策か講せしぞ密獵の事取締りしか海門艦隊回の巡察ハ果して眞正の探究を遂げざせし乎吾人實に疑なき能はず思ひ茲に至り再び樺太の徹を踏むかど地圖に接する毎に史を繰く毎に新聞の報道を聞くたびに慘然血涙を吞む北門備へなくして可ならんや

◎殖産上の千島

本邦經濟海の源は北海道にあり而して殖産中水産の豊地の千島三十六島の近海あり實に千島海岸及沿岸の地球土冠たる水産場たり左に其一斑を擧げんとす

第一水産千島近海の鯨族の棲息所あり

北海道に於ける鯨族の棲息所の千島近海を以て第一とす擇捉嶋沿海の如き尤も夥しく夏期に至れば内保灣内等に出没する事甚だしされど之を獵するもの稀に空しく黄金の利を捨つ尙諸嶋の海岸には鯨骨堆さるる之を拾集するものなしと云ふ

二千島沿海の昆布の産所なり

國後擇捉色丹等の沿海は千嶋特有の昆布産所あり殊にオンチコタン嶋マカナル嶋の間は海面茶褐色を呈し海上恰も緑絨を以て波浪を蔽へるに異ならず是れ蓋し昆布の生育せる故にして殆んど採りて盡すべからざる無盡蔵の昆布海なり

三千嶋沿海の鱈の産地あり

古守嶋端の幌延島の沿岸は鱈の巢窟にして漁人は一船毎に數萬尾を得ると云ふ又年々密〇し來る米國船は此近傍海に於て滿船旬日にして歸帆すと云ふ帝國の臣民聞て何如

となす

四千島近海は貴重海獸の巢窟あり

千島沿海の獨り昆布鯨鱈の産所たるのみならず陸地の金銀に亞ぐべき貴重海獸の巢窟たり臘虎は得撫嶋の特産たり海品の新知幌茂嶋沿海に多く温朋嶋の如きは得撫色丹茂

五雜魚

鮭章魚は鱈に次きて巨額の取獲あり此等群集の爲に常に水色を變ずると云ふ其外鱒鮭亦多しと云ふ

第二鎖山千嶋の地狹しと雖も全地山岳の重疊より成る國後擇捉得撫等の山中に礦物少しとせず硫黃の如きフレトルバのプラトチムホエツ、得撫、擇捉、國後等に於て巨額の産出あり又官林面積は凡そ拾五万三千五百町歩もありと云ふ

◎千嶋方策

吾人已に千島の地理歴史状態に就き喋々喃々せりされば是より千島に對する將來の方策を陳せんとす抑千嶋を無人嶋の如くにして開放するは國民も政府も諸外國も勝手に

密獵の大利を得せしめ進んでは占領せよと謂ふの意乎吾人の憂茲にあり蓋し是れなからしむるは吾人臣民の急務ならずや

殖民と云ひ探究と謂ひ移住と謂ひ其聲朝野に喧し吾人之を喜ぶと雖も唯其外の急あるを知りて内を顧みざるに賛成し能はざるなり即世間一般の潮流の南洋ノギンコにのみ注ぎて地味膏腴平原相接し海陸の産物皆以て内地に越えたる空漠の地たる北海道殊に北海道の寶庫たる千嶋には至て冷淡なるなきや千嶋の地たる無盡藏黄金の水産物あり今や外國人の密獵に係かり大利の外人の専有に歸せり吾人憂憤に堪へざるなり宜しく盛に内地人民の殖民を企て此無窮の利益を本邦に留めん事を主張するものなり左に殖民に對する方法を擧げんとす

第一政府の千嶋殖民事務所を設置し是を獎勵すべし

政府の外務省内に殖民課を置き布哇黒土其哥等に關して移住を獎勵しつゝあり是れそも何故ぞ一時民利を思ひ一の國權を重んぜんが爲あり吾人は當局者が書生的の事業をなすに驚く所謂内を棄て、外に急なるを以て也千嶋の利の布哇ノギンコより何れぞや願くは當局者が布哇及ノギンコに對する眼光を千嶋に轉じ寶庫に守衛を置か

るゝこそ政府の重任ならん

第二移住者には保護金を補助すべし

國を思ふの赤心は誰か是れなからん所謂故郷を離るゝの嘆きの世間人情の常若しも此情緒にして人心中に存せずと言ひ、是れ人間界のものたらざるあり今や此情緒に打ち勝ち親じき朋友親戚に分袖し遠島に赴く活大の見識と果斷とによるされば保護金を補助して以て褒賞獎勵し離れ難きの情に打ち勝たしめ天晴れ事業に従事せしむる是れ移住者に對する義なり國を起すの資本なり

第三千島の土地を五ヶ年間無代にて貸下ぐべし

政府も國民も北海内地のみの利を知りて内地に屬する富庫ある千島を知らざるものと如し吾人の政府も國民も甚た國を愛する薄さを憂ふ何とあれば政府の事業として明治の初年より北海道に果して幾何の福利ありしぞ少敷の屯田兵の其結果なるか世人千島は日本帝國の北門國庫なる事を記憶せよ吾人は千島の開拓の方策として土地を向五ヶ年間無税にて貸下ぐべき事を主張す夫れ如何なる土地にても三ヶ年の後に至れば支出相償ふものにして五ヶ年とならば其生計の餘慶幾何ぞやされば全國貧

窮に苦しむ臣民及災害を蒙りし多數同胞此策を得ば豈に應せざるの理なからん
第四千島に監獄を設置すべし

北海道は帝國の北門而して千嶋の亦北海道の鎖鑰なり北洋水産の中心なり外國密獵船の集點なり然るに住民些少交通不便軍艦の巡視すら少きは向ぞや殊に國後郡硫黃嶺山の如たの年々千餘人の坑夫を使役す而して皆内地より雇入れたるものにして勞銀の高貴なるのみならず使役する亦困難の事情なきにあらざると是れ吾人が尤も憂悶する所の事情なり故に國後擇捉付撫島地方に監獄を新設し囚徒をして道路開墾土地開墾坑夫等に當らしめば其利益實に僅少にあらざるべし希くは政府も世人も石川島空地の監獄に注ぐ處の意を一轉して千島監獄新設の事を主張せんか

殖産工業の盛なるは國の富源なり千島の如き天然の水産物あるは是れ天與の恩恵ありとも此餘慶を忽諾に附するぞ吾人策あり乞ふ述べん

第一水産業の團體を起さべし

北海道水産の利失れ莫大かり宜しく一の大團體を起し此業を盛らしめ一歩も外國人の侵す所なからしむるを務むる是れ今日の急務なり實あり海中の怒濤中に沈めり

孤々獨立は良く之を得べきものにあらず多數團體ありて初めて此業の盛大を謀り得

るなり

第二千島の水産講習所を設立すべし

水産の研究は學理も是れ學ぶがためからざるも實際見分に如くものあり而して其土地こそ水産物の盛なる地ならざるべからず千島は是れ我水産地の第一なり宜しく茲に水産講習所を設け全國有志を集め水産業を研究せしむべし

第三政府は水産事業に對する費用を貸下すべし

廿五年度の豫算案中に千島探究費顯るる政府は本年始めて千島の必要を認めしか而して本邦の富國策に他にあらず千島開拓にあり千島沿岸の水産業にあるのみ移住民を擧げて此に従事せしめよ政府は宜しく水産事業に對し飽きて干渉し及ぶ限り保護を與へ内地農商業の保護は計中七分廢する可なり其手をして其金をして千島の水産事業に代らしめよ此資本より生ずる利益は幾百倍なるや知るべからず

第四技手を派遣して鑛山を採鑛せしめよ

千島は獨り水産の寶庫たるのみならず内地山中に砂金及硫黃石炭等の埋没少なから

す土人及移住の者の何物たるやを知らざるなり政府の宜しく老練卓見の技手を遣ひして根室より東北に蜿蜒羅列する五十有余島の山中を採撿せしめよ中に閃晃たる黄金の散乱せるあらん

◎國防

我北門の關としての要地の千島なり今や千島の地の一望萬里人影だに見えず颯々たる風濤と鳥獸のわよく聲のみ露の手を伸ばして其海岸を窺へ英獨米尙ほ沿海に密獵なしつつあるの今日千島近海の慘雲あり故を以て一朝東洋に我日本に事あるの日の彼が碇繋場の好地として占領するあらん政府のかかる危急なるに干せず尙開放しあるの占領せよとの謂乎國民同胞は何時までも満足するの乎されば此北門に防禦の方法を講ずる今日の急務あらん後日急なるに際し事を議するは是れ及ばざる事あらん是れ吾人が千島兵備を論ずるの急なる所以なり吾人千島に就て論ずる所實に此一事に外あらざるなり

第一軍港を開き海軍營所を設置すべし

千島の軍備必要なる本論の如しされど陸軍よりは寧ろ海軍の急なるを信するものなり

り見よ無數嶋嶼の羅列は陸軍の進退出没をして自由ならしめざる事情あり吾人は第五鎮守府を設置せんとまで主張するを躊躇せざれ共北海道内地ありて地理上千島に許さざるべし故を以て鎮守府の營所を置て北洋の警備たらしむべし天實に我國に恩惠を與ふるや大なり千島東南海の風波穩かに良港亦多く何れの嶋嶼にも十尋以上の港灣ありて巨艦をして泊せしむるに足る況して沿海岩石と暗礁の多きは守禦の好地關所たり吾人をして營所の場所を擇ましめは擇捉の單冠灣か若しくは得撫の小舟港なり然れ共是れ素人の見のみ聞く海軍に名將多しと云ふ地勢上と海防上とに適合せる好地を採撿せしめよ吾人の云ふ處不可あるや否や

第二千島に海漁兵を設置すべし

桓武天皇時代の兵農主義の今日の屯田兵なり平時に於ての鋤を以て耕耘し干戈ある時に斧鉞を操る戦士吾人は當今の北海道に利ありて北海に益あるを知るよろしく千島には屯田兵に代ふるに海漁兵を募集するの緊急要件として特筆大書するものなり抑千島は耕耘するの原野にあらず海産物に富めるの嶋嶼あり地球上水産の冠たる地なりされば耕耘に代ゆるに水産の漁法に従事せしむるに如かざるなり若し此法にし

す土人及移住の者の何物たるやを知らざるなり政府の宜しく老練卓見の技手を遣ひして根室より東北に蜿蜒羅列する五十有余島の山中を探検せしめよ中に閃晃たる黄金の散乱せるあらん

◎國防

我北門の關としての要地の千島なり今や千島の地の一望萬里人影だに見えず颯々たる風濤と鳥獸のれのかく聲のみ露の手を伸ばして其海岸を窺へ英獨米尙ほ沿海に密獵なしつつあるの今日千島近海の慘雲あり故を以て一朝東洋に我日本に事あるの日の彼が碇繋場の好地として占領するあらん政府のかかる危急なるに干せず尙開放しあるの占領せよとの謂乎國民同胞は何時までも満足するの乎されば此北門に防禦の方法を講ずる今日の急務あらん後日急なるに際し事を議するは是れ及ばざる事あらん是れ吾人が千島兵備を論ずるの急なる所以なり吾人千島に就て論ずる所實に此一事に外あらざるなり

第一軍港を開き海軍營所を設置すべし

千島の軍備必要ある本論の如しされば陸軍よりは寧ろ海軍の急なるを信するものなり

り見よ無數嶋嶼の羅列は陸軍の進退出没をして自由ならしめざる事情あり吾人は第五鎮守府を設置せんとまで主張するを躊躇せざれ共北海道内地ありて地理上千島に許さざるべし故を以て鎮守府の營所を置て北洋の警備たらしむべし天實に我國に恩恵を與ふるや大なり千島東南海の風波穩かに良港亦多く何れの嶋嶼にも十尋以上の港灣ありて巨艦をして泊せしむるに足る況して沿海岩石と暗礁の多きは守禦の好地關所たり吾人をして營所の場所を撰ましめは擇捉の單冠灣か若しくは得撫の小舟港なり然れ共是れ素人の見のみ聞く海軍に名將多しと云ふ地勢上と海防上とに適合せる好地を探検せしめよ吾人の云ふ處不可あるや否や

第二千島に海漁兵を設置すべし

桓武天皇時代の兵農主義の今日の屯田兵なり平時に於てハ鋌を以て耕耘し干戈ある時に斧鉞を操る戰者吾人は當今の北海道に利ありて北海に益あるを知るよろしく千島には屯田兵に補ふるに海漁兵を募集するの緊急要件として特筆大書するものなり抑千島は耕耘するの原野にあらず海産物に富めるの嶋嶼あり地球上水産の冠たる地なりされば耕耘に代ゆるに水産の漁法に従事せしむるに如かざるなり若し此法に

て行れしめん乎事あるの日は千島警衛の熟練ある海軍兵となるを得るの便あるべく
漁業上の收穫は軍費及彼等生活の豊なる需用に應ぜべし
政府はよろしく海漁兵本部を海軍内に設置し普く府縣海濱の住民及有志者より募集
せよ彼等は喜んで海漁兵たらん

◎行政

千島の政治は實に二種特別の待遇にして内地北海道よりも亦緩なるべし政府も議會も
均しく特政を施行すべきなり

第一千島支廳を設置すべし

今日北海道が施行せる行政區劃は如何なる事情の存せるかは知らずと雖ども國後、
色丹、擇捉は紗那郡役所の支配に屬し其他擇捉の東北カムサッカに至るまでの得撫
新知古守三郡に屬せる嶋は根室郡役所の管轄なり吾人甚だ怪訝に堪へざるなり寧ろ
東京府の小笠原嶋に於けるや如く島廳を以て千島全体を統治するの便なるよ如かざ
ると信ず政府及同胞の意如何
第二千島に電線を架設すべし

絶海孤嶋の民—千島同胞が毎年十一月下旬より翌年四月に至るまで寒氣の爲に閉塞
せられ同島民は内地の愚か根室近傍よりも書信だに得る事能はずして彼の憐むべき
島民の故郷の天地に如何ある事件起りしり祖先の墳墓は如何なせしや知る能はず借
俊寛が鬼界島に竄流せられし如き思なせり良し其間僅か二三回の冬季航海ありとせ
るも交通の便を得たりと云ふべからず東京の書信は日に幾面ぞ書信尙遲し電話あり
て事を辨ず嗚呼同じ臣民にあり乍ら此境遇とは何事ぞ是れ吾人が根室（國後、擇捉
得撫）間に電信を架設し此憐れなる臣民に利を與へよ道廳が網走紋別に架設を先ん
じて何が爲に千島を後にせしを實に之を架設すること軍備上より見るも産業上より
見るも緊急ある事業なり當局者たるもの急に之を計畫實行せざるや思ひ茲に到れば
郡司大尉の蹶起豈偶然あらんや

明治廿六年六月二日印刷

全 年全月三日出版御届

全 年全月八日發行

淺草區老松町十七番地

編輯兼 田 中 東
發行人

淺草區並木町廿二番地

印刷人 宮 部 勘 七

淺草區老松町十七番地

發行所 好 文 堂

明治廿六年六月二日印刷

全 年全月三日出版御届

全 五月八日出版

淺草區老松町十七番地

編輯兼 田 中 東
發行人

淺草區並木町廿二番地

印刷人 宮 部 勘 七

淺草區老松町十七番地

發行所 好 文 堂

芳洲散士著 安蘇仙史序

古今 天下之豪傑奇談 東西 一名立身出世之種

洋製美本 全壹卷 正價拾錢 郵稅貳錢

本書は世の立身出世を望む人の爲に古今東西身を卑賤に起して天下の大權を雙手に握り或ハ一世經濟を一身に收め其一言一行は萬世の模範たる上の兒島高德豊臣秀吉より下伊藤春畝山縣合雪天下の系平に至り外フレテリッ、ボンペー、アマムスミス、コブデンブライト曹探孔明陶朱公より坂本龍馬山岡鉄舟勝安房板垣退助大隈重信に至るまで凡そ談の記すべく行の奇とすべきものは何れの邦何れの時代を問はず殆んど網羅し盡して聊か机上の友たらんとを期す其擬て百練の鉄となるものは水戸烈公の事蹟なり頼山陽の高論あり散じて萬葉の櫻となるものは小野小町の艶話なり市川團洲の奇行なり其趣味一頁は一頁より多く其記事や一段は一段より快なり千變萬化讀者をして巻を終るまで倦む能とざらしむる者本書絶群なる所以なり而も讀み終て其精心淵然思はず案を打て蹶起せしむる者本書の特色なり乞ふ巻を繕ひて眞價を知れ

芳洲散士序 三益文民著

一代天賦資産

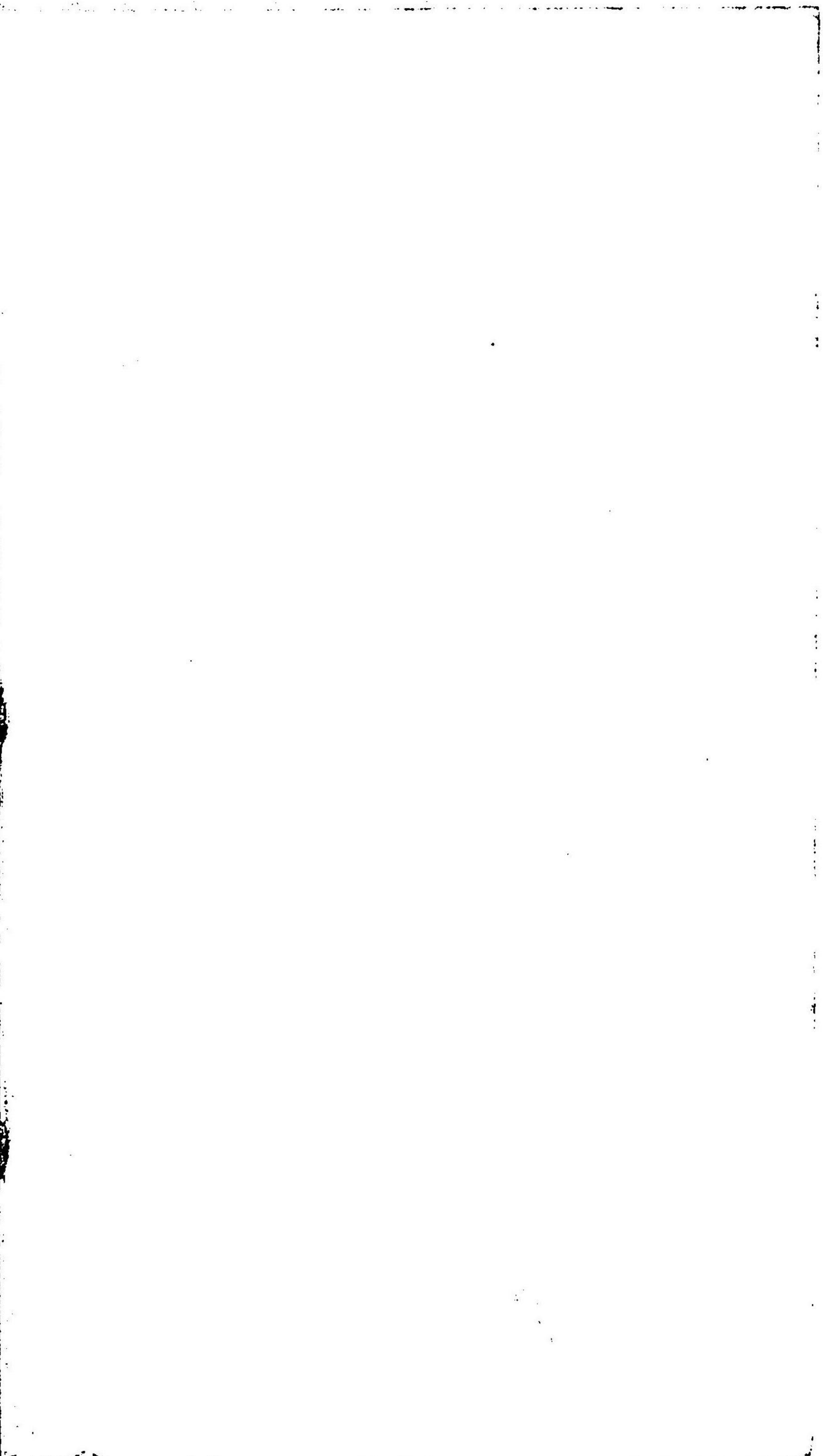
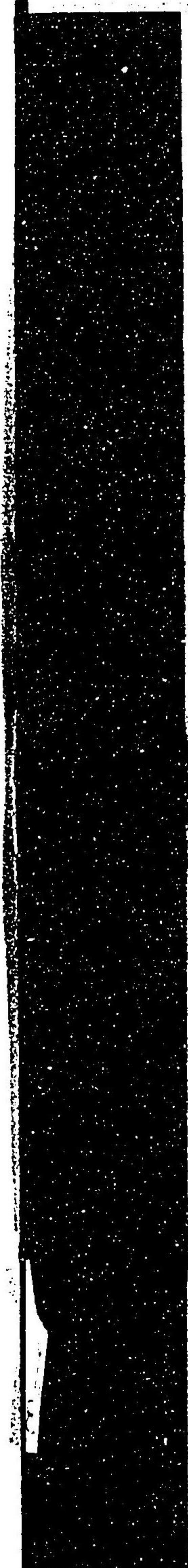
定價拾五錢 郵稅四錢

方今經濟商業の書續々梓に上り汗牛充棟の時に當り驟然頭角を顯へすもの一人一代天賦の資産なり其記事や凡て自治獨立の道を講じ何人にも備はる天賦の資産たる原理を詳細に説明し加ふるに其人の生年月日により適當の商業工業二百餘件を撰抜しわれは世の失敗者にして空手成す事も無く親戚故舊の補助に甘まんじ座食するの徒い速に本書を一讀し以て各自適當の方針を定めなば身に一錢の資力なくも日々相當の収入を得らるべく從て立身出世の端緒本書より開發することもあらん

淺草區老松町十七番地

好文堂書店發行

P-20



北航
艇隊 千島探討

国立国会図書館

023210-000-8

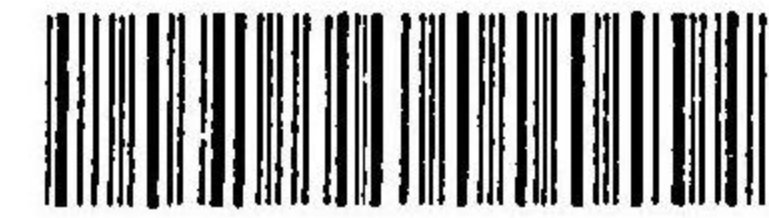
特51-978

千島探討(北航艇隊)

田中 東 / 編

M26

ADC-0047



特

9